

一鳴驚人

— 中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から — 文と訳・有為楠 君代

中国語では「一鳴驚人」と表記します。先ず、本の中の説明です。

「戦国時代、齊の威王が王の位に就きました。齊は弱小の国でしたが、威王は政治に真面目に取り組まないで、楽しく遊び暮らしていました。大臣たちは、こんな王様を見てとても困っていました。

三年経った頃、家来の中にいた、淳于髡ジュンウコンと言う人が威王のところへ行き言いました。

『大王様、私共の国には、一羽の大きな鳥がいて、この王宮に住んで三年になります。この鳥は飛びもしないし鳴きもしません。大王様、これはどうしてなのでしょう？ 当ててみてください』

威王はとても聡明な人でした。この淳于髡が自分のことを風刺しているのだと分かりましたので、すぐに立ち上がり、はっきりと言いました。

『ああ、この大きな鳥は、もうすぐ飛び立つだろうよ。一度飛び立てば、天空高く舞い上がり、一声鳴けば、世の人々を驚かすに違いない。ま、お前はのんびりと見ているが良い』

この後、齊の威王は遊ぶのをやめ、熱心に政治を行いましたので、齊の国は日増しに強大な国になっていきました。

言葉の説明には「一声鳴けば人を驚かせるというのは、普段あまり目立たない人が、一旦仕事をすると、人々が驚くような成果をあげることにたとえ」とあります。例文は、「彼の普段の成績はまあまあだったけれど、今回の試験では一躍トップに躍り出た。全く、『鳴かなければそれまでだけれど、一度鳴けば人を驚かす』だね」とあります。

この「四字成語」、中国では、例文にあるように、「不鳴則已ぶめいぜい、一鳴驚人いちめいじんじん」と八字纏めて、「鳴かなばそれまで、一度鳴けば人を驚かす」と使い、目立たなかった人が目覚ましい成果をあげた時に、肯定的に使いますが、日本では「四字成語」としてはそのまま使われていませ

ん。齊の威王のお話は有名ですが、日本で作られた「成句」は、「(三年) 鳴かず飛ばず」というもので、使うときも、否定的な意味合いで使うことが多いようです。

プロ野球のドラフト会議で、一位指名の選手が、その後期待されたような活躍が出来ず、忘れられていった時などに、「あの選手は鳴り物入りで入団したのに、その後はさっぱり鳴かず飛ばずだね」などと使うことが多いですね。

「一鳴驚人」の背景にあるお話からは、ダメと思われた人間が急に人を驚かすような変化を遂げると言う希望が感じられますが、日本の「鳴かず飛ばず」は、其の儘ダメになってしまうと言う、マイナスのイメージがあります。このお話に関する限り、中国人のおおらかさ、懐の深さを感じます。

以前から感じていることですが、日本では、一度マイナスのレッテルが貼られると、それを振り払うのは大変です。皆さん、ご記憶にあるでしょうか。随分前のことですが、某県の警察本部長が着任して間もなく、交番の巡査が不祥事を起こし、それをもみ消そうとした巡査の上役達が摘発され、本部長も責任を追及されました。

ここで問題なのは、不祥事をもみ消そうとした人たちの意識が、着任早々の本部長の経歴に傷がつかないように配慮したことです。

何千人、何万人という警察官の中の一人が不祥事を起こしたと言って、直接の上司ならいざ知らず、着任早々の県警本部長の経歴に傷がつくと考えるのはおかしいですね。‘不祥事をどのように処理したか’、‘以後同様の不祥事が再発しないようにどのような策を打ち出したか’こそがリーダーに問われる資質であり、そのような経験こそがリーダーを成長させるチャンスだと思おうのですが、マイナスに敏感な日本の社会では、どんな不祥事も無かったことにするのが一番と考えるのでしょうか。日本では、三年鳴かなかった鳥には、もう鳴くチャンスはないようです。

